山崎郷土研究会報

NO. 130
平成30.2.25
山崎郷土研究会
兵庫県宍粟市山崎町
大谷司郎

明治以降の山崎の年表（三）

大谷司郎

明治以降の山崎を中心とした出来事を年表にして三回目になります。今回は、明治四十二年（一九〇九）から昭和二年（一九二七）までを取り上げます。富国強兵策や殖産興業と列強に追いつけ追い越せと、大急ぎで先進国の仲間入りを前面に出し、そして戦争への道を歩み続いていくわけですが、この時期に、この地に大きな影響を与えた「郡是製糸工場」のことに触れてみます。

『郡是製絲株式会社六十年史（昭和三十五年発行）』によると、「明治四十二年五月二十五日設備を賃借して宍粟・雲原・萩原各分工場設置を決議」とあり、翌年には「安志へ移転した宍粟製糸株式会社を買収し、宍粟工場の操業を開始」とあります。また、大正七年（一九一八）には「安師（安志）村から山崎町中広瀬に移転して、山崎工場と改称」とあることから、現宍粟市役所や夢公園一帯が郡是製糸山崎工場の地となり、同工場が閉鎖される昭和三十六年（一九六一）までの四十三年間、当地域の生糸産業及び養蚕業の中核施設として、また、近郷の若い女性達の働く場として大きな役割を果たしてきました。昭和元年（一九二六）の製品価格の暴落も乗り越え、最盛期の昭和六年（一九三一）には従業員数七一二名を数えています。

その時期に郡是製糸工場で働いた人たちの記録が『私達の自分史・娘時代グンゼに勤務した業生、教婦、教育係の記録（一九八九年発行）』に残されています。山崎工場で働いた人たちも、娘時代を回顧して当時の寮生活の様子や仕事への姿勢などを記していて、大正から昭和初期の様子がうかがわれる貴重な資料となっています。

目次

明治以降の山崎の年表（三）……大谷司郎 1
福原謙七について　八四年の生涯を貫くもの……山崎闇斎研究会共同研究グループ 4
因果はめぐる……浅田耕三 10
浅田耕三先生　兵庫県ともしびの賞受賞……10
「山崎歴史郷土館（一）」……河本雅視 12
青年団と盆踊り……伊藤一郎 15
波賀城と城主中村氏のこと……竹内克司 19
『〇〇町はどこだ』と『国絵図』に追加……清水哲 21
播磨国風土記宍禾郡比治里一考察……片山昭悟 23
研修旅行　備中松山城と吹屋……研修部 25
会員・家族の文芸……26
事務局だより・編集後記……27

明治以降の山崎の年表（5）

西暦年	和歴	年	月	日	事項	出典
1909	明治	42	1		那波徳治が郡長になる。	兵庫縣宍粟郡誌
1909	明治	42			前年に土万第一・第二尋常小学校が合併し、土万尋常小学校となっており、高等科の併設により、土万尋常高等小学校となる。	山崎町史
1909	明治	42	10		山崎町公会堂において宍粟郡連合青年団結成される。	兵庫縣宍粟郡誌
1910	明治	43	5	25	郡是製絲株式会社が、安志へ移転した宍粟製糸株式会社を買収し、宍粟分工場を経営する。	郡是製絲（株）六十年史
1911	明治	44			在郷軍人山崎分会が創立する。	山崎郷土会報No.50
1912	大正	元			山崎町に初めて電燈がつく。	山崎郷土会報No.50
1912	大正	元			山崎小学校講堂新築成る。	山崎郷土会報No.50
1912	大正	元			宍粟郡木炭同業組合が設置される。	山崎郷土会報No.50
1913	大正	2			宍粟郡役所が新築成る。	山崎町史
1913	大正	2			山崎友施会が創立される。	山崎郷土会報No.50
1913	大正	2			最上山に石灯籠、手水鉢できる。	山崎郷土会報No.50
1914	大正	3			桜島大噴火で当地方にも灰が降る。	山崎郷土会報No.50
1914	大正	3	4	5	山崎町立技芸専修女学校を宍粟郡立実科女学校と改称する。	創立百周年記念誌（山崎高校）
1914	大正	3			第1次世界大戦おこる。	
1914	大正	3	10		山崎歌壇の薔薇会が短歌集『薔薇』を創刊する。	山崎町史
1915	大正	4	1		宍粟郡畜産組合を設置し、家畜市場の開設や畜産改良を実施する。	山崎町史
1915	大正	4	7		宮宗眷三が郡長になる。	兵庫縣宍粟郡誌
1915	大正	4			隔離病舎移転改築する。	山崎郷土会報No.50
1915	大正	4	8		山崎新聞第1号発刊される。	兵庫縣宍粟郡誌
1915	大正	4			山崎警察署管内で人力車が130台あり。	山崎町史
1915	大正	4	11		御大典祝賀行事に全町民賑わう。小学生旗行列、灯燈行列、流し手踊り等、辻にわか行う。	山崎郷土会報No.50
1916	大正	5			山崎町役場、本町に新築落成する。	山崎郷土会報No.50
1917	大正	6	2		今田栄次が郡長になる。	兵庫縣宍粟郡誌
1917	大正	6	7		前野善次郎氏再び山崎町長となる。	山崎郷土会報No.50
1917	大正	6			地理学者志賀重昂氏、旧藩主本多渉氏学習院生徒を伴い来崎する。小学生手旗で迎える。	山崎郷土会報No.50
1918	大正	7			日本メソジスト教会聖旨幼稚園鹿沢菅江氏宅にできる。	山崎郷土会報No.50
1918	大正	7	2		山崎町料理組合が発足（組合加入者96軒）	山崎町史
1918	大正	7	7		前野忠雄が山崎町長になる。	山崎郷土会報No.50
1918	大正	7			養蚕業の進展をめざし「宍粟郡蚕糸同業組合」が設立される。	山崎町史
1918	大正	7			郡是製糸会社、安師（安志）村から山崎町中広瀬に移転して、山崎工場と改称する。	郡是製絲（株）六十年史
1918	大正	7			第1次大戦休戦条約が成立し、祝賀旗行列。	山崎郷土会報No.50
1919	大正	8			商工会の前身である「商業会」が発足する。	山崎町史
1919	大正	8	4		文部大臣の認可を得、宍粟郡立実科女学校を郡立実業学校と改称し、新たに男子部を設置する（男子部は大正11年度まで）。	山崎郷土会報No.50
1919	大正	8	6	1	忠魂碑鹿沢（現市立図書館の地）に竣工される。	本多家文書
1919	大正	8			郡是製糸工場拡張される。	山崎郷土会報No.50
1919	大正	8			第1次大戦後の好景気に恵まれ、山崎の花柳界大いに賑わう。	山崎郷土会報No.50
1919	大正	8			山師、馬喰等の散財で地獄谷宿場町的に繁盛する。	山崎郷土会報No.50
1919	大正	8			山崎検芸者60人を超す。	山崎郷土会報No.50
1919	大正	8			宍粟郡の木工伝習所が開設され、挽物細工の技術習得に力をいれる。	山崎町史
1919	大正	8			菅野村に電灯がつく。その後次第に広がる。	山崎町史
1920	大正	9			乗合自動車山陽が総道神社前にでき、姫路・山崎間を往来する。	山崎郷土会報No.50
1920	大正	9	6		山崎町家庭会創立する。	山崎郷土会報No.50

明治以降の山崎の年表(6)

西暦年	和歴	年	月	日	事項	出典
1921	大正	10	6	8	本町にあった山崎町役場の会議室を保育室とし、明源寺を運動場として町立山崎幼稚園が発足する。	山崎幼稚園80周年記念「ゆめ」
1921	大正	10	9	1	山崎幼稚園が山崎小学校の一部を借りて移転する。	山崎幼稚園8~~8~~0周年記念「ゆめ」
1921	大正	10			キリスト教会並びに聖旨幼稚園中門下に新築移転する。	山崎郷土会報No.50
1921	大正	10			姫路自動車が山田町にでき、夜間も姫路・山崎間を往来する。	山崎郷土会報No.50
1921	大正	10			竜山自動車ができ、竜野・山崎間を往来する。	山崎郷土会報No.50
1921	大正	10			竜野・山崎往来の馬車が姿を消す。	山崎郷土会報No.50
1921	大正	10			山崎町庄能に絹糸工場が操業開始する。	山崎町史
1922	大正	11	4	1	山崎幼稚園が門前の八幡神社下に園舎新築移転し、開園する.	山崎幼稚園8~~1~~0周年記念「ゆめ」
1922	大正	11	4	1	郡立宍粟実業学校は県に移管され、県立山崎実業学校と改称する。	創立百周年記念誌(山崎高校)
1922	大正	11			山崎女子青年団創立する。	山崎郷土会報No.50
1922	大正	11			日本農民組合が組織され、その傘下として郡内22か村に日農支部が結成される。	山崎町史
1922	大正	11			宍粟郡内の人力車数127台。自転車が漸次増える。	山崎郷土会報No.50
1923	大正	12	3		橋本義雄が郡長になる。	兵庫縣宍粟郡誌
1923	大正	12	3	31	郡制廃止により、宍粟郡自治体廃止となる。	兵庫縣宍粟郡誌
1923	大正	12	4	1	郡制廃止により宍粟郡は地理的名称となる。	山崎町史
1923	大正	12	4	9	山崎実業学校は男子部を廃止して、兵庫県立山崎高等女学校と改称し、始業式を実施する。	創立百周年記念誌(山崎高校)
1923	大正	12			山崎警察庁舎新築成る。	山崎郷土会報No.50
1923	大正	12	3		兵庫縣宍粟郡誌が編集発行される。	山崎郷土会報No.50
1923	大正	12			最上山に鐘撞き堂が建ち、時の鐘始まる。	山崎郷土会報No.50
1924	大正	13	10		福原謙七翁の石碑建つ。	山崎郷土会報No.50
1924	大正	13			新富座ができる。活動写真が町に来ると楽団を繰り出し宣伝した。	山崎町史
1924	大正	13	8		6月1日～8月24日降雨なく大旱魃。(上寺に石碑残る)	山崎郷土会報No.50
1924	大正	13	9		旭座が焼ける。芝居観劇中に失火する。	山崎郷土会報No.50
1924	大正	13	11		旭座の焼跡に木下曲馬団猛獣を連れて来る。サーカスのジンタ(広告宣伝の吹奏楽)の曲が町に流れる。	山崎郷土会報No.50
1924	大正	13	12		営林局署制度により、大阪営林局山崎営林署と名称変更される。	山崎町史
1924	大正	13			中鹿沢に木工伝習所ができる。	山崎郷土会報No.50
1925	大正	14			枯れすすきの唄と鳥打帽が流行する。	山崎郷土会報No.50
1925	大正	14			旭座が再建される。こけら落としに中村福助が来る。	山崎郷土会報No.50
1925	大正	14			山崎歌壇の草の実会を結成(昭和2年に年刊歌集『くさのみ』第1輯を発行する)。	山崎町史
1926	大正	15			相変わらず花柳界繁盛し、艶歌師や法界屋が紅燈の巷を往行する。	山崎郷土会報No.50
1926	大正	15	5		山崎歌壇の不死鳥社が雑誌『不死鳥』を創刊する。	山崎町史
1926	大正	15	7	1	河東村青年訓練所を設置する。	河東小学校沿革史
1926	大正	15	7	4	同青年訓練所で入所式並びに開所式を挙げる。村長他臨席、入所者108名。	河東小学校沿革史
1926	大正	15			夏は十二ン波に屋形船を浮かべ鮎狩りが盛んになる。	山崎郷土会報No.50
1926	大正	15			紺屋町の美喜久座潰れる。	山崎郷土会報No.50
1926	大正	15	12		大正天皇崩御される(町民八幡さんでお百度を踏む)。	山崎郷土会報No.50
1926	昭和	元			山崎町の戸数1,235戸、人口6,065人となる。	山崎郷土会報No.51
1927	昭和	2	4	7	農業公民学校始業式を行う。	河東小学校沿革史
1927	昭和	2	6	14	青年訓練所を農業公民学校に充足の件認可される。	河東小学校沿革史
1927	昭和	2			山崎小学校表門両側の堀埋立て始める。	山崎郷土会報No.51
1927	昭和	2			山崎町に初めてカフェー民衆できる。	山崎郷土会報No.51
1927	昭和	2			活動写真盛んになる。	山崎郷土会報No.51

福原謙七について……
八四年の生涯を貫くもの

山崎闇斎研究会共同研究グループ

はじめに

山崎の市街地を一望の下に俯瞰できる最上山公園への途中に「福原謙七翁碑」があります。この碑は宍粟市の数ある記念碑の中でも端正さ、刻字の確かさ、そして碑文の格調の高さでは突出しています。大正十三年の建立以降、九十三年の星霜を経て、この碑そのもの、そして撰文は、日に新たに私たちに迫ってくるものがあります。

何がその迫力をつくり出しているのか、以下の小論で考察していきたいと思います。なお本稿は、山崎闇斎研究会会員の共同研究で、其々が持ち味を生かして協力し纏めあげたものです。

第一章、一八四一～　生家、家業など

第二章、～一八六六年　学びの時代　よき師や友との出会い

第三章、一八六七～八四年（二六～四三歳）「山崎本多侯侍講兼藩校教授」・「飾磨縣学区取締」・「揖東郡長」・「印南郡長」の時代

第四章、一八八四～一九〇三年（四三～六二歳）ふるさと山崎で、教育・産業の振興に努めた時代

おわりに、一九〇三～二四年（六二～八三歳）晩年、大阪時代

この小論の第一章は堀口真吾、第二章は髙井淳、第三・四章は松下宣夫が中心となって分担・執筆し、ファイルへの全体とりまとめは松下宣夫に負うところが大きかった。また、鎌田裕明が監修、はじめに・おわりに並びに補筆を行い、下多謙一が校正と全体への目配りに努めました。山崎闇斎研究会員が行った初めての共同研究で、資料の共有や意見の交換など互いに親交を深めながらの纏めでした。結果については、厳正な史料の解釈や分析、そして収集などに不十分な点もあり、さらに一層の研鑽を要すると思っています。

第一章　生家、家業など

謙七（1）は天保十二年八月二日、宍粟市山崎町、今の伊沢町で生まれました。同じ年、長州で伊藤博文が呱々（ここ）の声を上げています。百姓の子に生まれた博文は長州という日本史上希有な役割を果たした藩で、持ち前の気力と知力で初代内閣総理大臣として位人臣（くらいじんしん）を極めました。謙七のあゆみを辿るとき、博文との共通項、即ち塾で学び、広い世界に出て行ったことなどに気づき、岐路は奈辺にあったかについて考えたことでした。

当時の山崎の地は本多家一万石の領地で幕府が西の要として配した要所でもありました。山崎藩ご城下は一万石とはいえ、先の松井松平家は五万石その前の池田家は六万三千石の御城下で、城郭を中心に堀がめぐらされ家中の武家屋敷街と町屋の間には城戸（きど）門番が配され、町屋は碁盤の目に区画された通りごとに町名がついておりました。

本町通り、西町通り、北魚町通り、紺屋町通り、福原町通り、伊澤町通り、出水町通り、寺町通り、冨士野町通り、といった城下町特有の通りによる街割りで、これに山田村、今宿村、庄能村、横須村、上寺村がついていたので経済的見地からも立派な商業圏のなり

たちでありました。

その町屋の通りでいう出水町通りと伊澤町通りが交差する角地に米を商っていた謙七の生家はありました。鬼連子に囲まれた商家玄関の佇まいは当時の米屋の繁栄をうかがわせ、中に入ると広い土間と玄関かまちに畳の間がひろがり、中心に商机囲いと大福帳が備えてありました。現在もその家は木造家屋として存在しております。店先の風貌は現代商家風になっていますが、外周の壁・屋根は江戸末期から明治に建造された様子が見られます。

福原家の菩提寺は寺町通りの北約五〇メートルの上寺の山麓に位置する臨済宗妙心寺派天龍山恩沢寺で、謙七の墓も本堂の裏山にあり(2)、大正十三年二月六日没と刻まれています。福原家の末裔の方々がおまつりされています。このお寺の先代の御住職早川勝道氏によりますと、檀家参りの際に福原家の御息女福原幸子さまからお聞きになったことですが「本多家のお殿様がご面談に御越しになられたときは奥の間に入られこの座におすわりになったのですよ」ということでした。筆者も隣家のよしみでその薄暗い陰影のある部屋のことはよく覚えています。なお、後述する「靖献義塾」の位置ですが、出水町通りに面し、実家より徒歩で八〇歩余（約六五メートル）の距離にありました。

註

(1) 福原謙七氏の姓については数多くの著書や碑文で「福原とされていること、撰文の姓は「福原」となっていること、及び「福原謙七翁碑」で「考は横野儀右衛門と称し、初めは隆蔵と呼び、中には横尾練蔵と称し、後に姓を福原に復し、名を謙七と改む。」と記されていることにより、本稿では姓を福原に統一して用います。なお、国立国会図書館の蔵書目録では、横尾謙七名の著作七冊の出版年は一八七三～一八七八となり、福原謙七名では九冊、出版年は一八八一～一九一四となり、明治一四年以降はすべて福原です。「称」するは撰文者田艇吉の認識であり、謙七の認識でもあります。また「復」するは元に、正しく戻す、と解します。

(2) 戒名は「弘学院謙堂宗信居士」、幕末から大正に至る激動の中で広く、深く学んだ謙七の人生を讃えているように感じられます。

第二章　学びの時代　よき師、よき友との出会い

福原謙七(3)は「学に志し」、山崎を出て大坂の松本巌、後藤松陰、篠山の渡辺弗措、柏原の小島省斎、備中の阪谷朗廬ら高名にして学識ある師について儒学を修めました。謙七の学びの時代はペリーの黒船来航で始まる欧米諸国の厳しい開国要求という外圧の中で、開国か攘夷で揺れ、尊皇論の高まりの中で幕府が崩壊するという大きな歴史の転換期でした。謙七の家は米穀商でした。たとえば大坂堂島の米相場市場に係わる人から、大坂をはじめ大都市からの多くの情報があったかもしれません。他の人が手にしたことの無いような本を読んだり話を聞く機会があったのかもしれません。何らかのきっかけで郷関を出、波乱万丈の人生がスタートしました。謙七の学びが、大坂で始まったことについては、山崎本多藩の大坂城定番という公役で六〇名を超す藩士が大坂に常駐していたこと、この藩士が後藤松陰に学んでいたこと(4)が理由として考えられます。

最初に大坂の松本巌(5)に学びます。松本巌は文政二年（一八一九）出雲で生まれ、江戸で梁川星巌、安積艮斎に師事し学を深めました。出雲大社神徳弘布の名の元に京坂の間に往来し志士を糾合し

鋭意王事に尽瘁し、強く勤王思想を抱き行動しました。謙七はその影響を大きく受けています。

次に後藤松陰(6)の塾で学びます。松陰は寛政九年（一七九七）美濃に生まれ、京都で頼山陽の最初の弟子になりました。謙七は松陰を通して頼山陽の影響を受けています。このことは明治六年（一八七三）に謙七が著した『皇朝靖献遺言』に貫かれている勤王思想でも明らかです。松陰は文政三年（一八二〇）大坂で開塾しました。文に優れ、「詩の廣瀬旭荘、文の後藤松陰」と呼ばれています。謙七の文才はここで育てられたと思われます。

そして篠山の渡辺弗措(7)の塾に転じます。弗措は文政元年（一八一八）篠山で生まれ、江戸の昌平坂学問所の塾頭も務めたことのある大儒者です。弗措は、前述の『皇朝靖献遺言』に序文を寄せて次のように述べています。「其編輯の功、前人に倍すと雖も可なり、以て作者の苦心を見るに足る」「能く人心を激発するに至るは、此書有るのみ」と、これまでにない感動を与える書であると評価しています。弗措からこれだけの序を送られた謙七の思想家としての実力は着実に付いたと言えます。弗措は安政四年（一八五七）に江戸から篠山に帰っているので、謙七はそれ以後に学んだと推察されます。

謙七はその後柏原の小島省斎に学んでいます。省斎(8)は氷上郡青垣町佐治で生まれ、京都の猪飼敬所のもとで学びます。帰郷後藩校創設に係わり、文久二年（一八六二）から側用人となり藩政に参画し藩論を勤王に導き、この前後に謙七は省斎に学んだと思われますが、省斎は常に藩の枢機に参与して多忙でありました。

ここにおいて謙七は備中の阪谷朗廬の興譲館に入ります。阪谷朗廬(9)は文政五年（一八二二）、備中（川上郡九名村）で生まれ、古賀侗庵の門に入りすぐに塾頭になります。病床の母の看病のために井原に帰り、嘉永六年（一八五三）興譲館を設立、初代館長になりました。謙七は幕末にその興譲館に入ったことになります。朗廬は間もなく、請われて広島藩侍講になります。明六社の同人ともなった開明的な朗廬の思想にも深く学ぶところがありました。謙七は朗廬から尊王とともに、西洋文明を強烈に吸収しました。

福原謙七はこのような当時一流の儒者のもとで、「身に褞袍を纏うて寝食を廃し蛍雪の難苦を積む」(10)十有余年の学びを蓄積しました。多くの漢籍に親しみ、記憶し、現実に適用して検証するという知的な訓練を身につけました。このことは、山崎藩、揖東郡、印南郡その後の地域での活躍で証明されるように思えます。

この章を結ぶにあたって、ふるさと山崎で早世した安原昭之の墓銘碑(11)を紹介して謙七理解に資したいと思います。昭之は謙七よりも四つ歳下、時に共に遊学し、学を論じ、帰郷後は藩校の教授となり、謙七と同じ道を歩んだことがありました。宍粟郡長、山崎町長を歴任、因幡街道大工事などにおいて政治力を発揮しました。昭之の訃報に「余、誰と道や時事を論ぜん」と悼んだ謙七の深い嘆きに、山崎藩医にして儒官の家に生まれた安原昭之との交友の深さが看取されます。

註

(3) 田住豊四郎『現代兵庫県人物史』県友社、明治四十四年版、五〇七～五〇八頁。小稿は、此の書に多く依っています。同書には、加藤弘之東京帝国大学総

長ほか嘉納治五郎、大鳥圭介などの題字が収載されており、斯界での評価の高さが分かります。また、福原謙七については、「儒者」として他の人物より詳細に、精細ある記述をしています。「福原謙七翁碑」とならぶ謙七研究の主要な資料と考えられます。

(4) 山崎本多藩『覚帳』万延元年（一八六〇）八月・一〇月の条には、山崎藩の俊秀名嶋太蔵や磯部斧太郎が後藤松陰に師事した記載があります。詳しくは鎌田裕明「続、逝きし人々のころ」『山崎郷土会報』一一七号一～十一頁参照。万延元年は謙七、十九歳、塾での出会いがあったかもしれません。

(5) 島根県学務部島根県史編纂掛『島根県史九』昭和五年発行五七八～五八三頁島根県出版

(6) 木崎愛吉『篠崎小竹』大正十三年版九一～九四頁（【附載】後藤松陰）玉樹香文房出版

(7) 渡辺弗措他『弗措先生及遺稿』大正十一年渡辺望出版一～十二丁

(8) 松井拳堂『丹波人物志』昭和三十五年（八月）版『丹波人物志』刊行会出版（小島省斎　二五五頁、田健次郎　三五六頁、田艇吉　三七一頁）

(9) 阪谷芳郎『阪谷朗廬先生五十回忌記念』昭和四年　阪谷芳郎出版一～十頁

(10) 田住豊四郎『前掲書』　五〇七頁

(11) 謙七「故安原昭之之墓」墓銘碑撰文、上寺の安原家墓地にあります。この撰文は森本一二先生が整理されたものを参考にさせて頂きました。

第三章　「山崎本多侯侍講兼藩校教授」・「飾磨縣学区取締」・「揖東郡長」・「印南郡長」の時代。

慶応三年（一八六七）、謙七は二十六歳、大阪、丹波、備中での修学を終えて山崎へ帰ってきました。それはまさに、二六四年間にわたる江戸幕府が終わり、日本が集権的な近代国家へと転換していこうとする激動の時代でありました。山崎藩の藩主本多忠鄰侯は難局を打開するため、儒学の基礎の上に新知識を備えた謙七を、有為な人材として藩校思齋館教授として迎えたのです。これは謙七と共に学び、藩校教授として席を共にし、のちに宍粟郡長となった安原昭之や、大阪の後藤松陰の塾に学んだ名嶋太蔵、磯部斧太郎の推薦があったのではないかと考えられます。

明治五年（一八七二）、学制が発布されると、統一国家にふさわしい近代的学校教育制度の整備が進められることになります。謙七は飾磨縣学区取締に任じられ、小学校の設立、教育課程や施設の整備、不就学児童の状況把握と就学促進に努め、公教育の水準を高めるための壮大な試みを現場の最前線で統括することになります[12]。

明治九年（一八七六）兵庫県は教育行政を統一する為に、兵庫県教育会議を開催。会議の出席者は、学区取締三七名、《竜野からは竜野最後の儒学者と言われる本間貞観（じょうかん）（虚舟）が出席》、官立師範学校派出訓導十五名の全五十二名でした。議題は「小学教則」、「小学試験法」、「小学校則」。福原謙七学区取締は「女子体操の可否」、「珠算教育の可否」について意見を述べています[13]。

明治十二年（一八七九）学区取締に次いで、福原謙七は揖東郡長に任命され、播磨十六郡の一郡としての基礎作りに努めました。揖東郡は現太子町を中心に姫路市、たつの市の一部に及ぶ一町一三二村からなり、郡役所は播磨国鵤村壱番地屋敷の斑鳩寺の宝勝院に置かれ、一月三〇日の開庁でした。

明治十五年福原謙七は印南郡長に任命されます。印南郡は現高砂市を中心に姫路市、加古川市の一部に及ぶ二町九六村からなり[14]、

郡役所は曾根村の曾根神社神官の居宅を借り上げていました。

日本の地方行政の近代化と組織化は明治十一年（一八七八）の「地方三新法」施行から始まります。郡長について大石嘉一郎は次のように記しています(15)。「地方税規則、郡区町村編成法などを以て殖産興業、富国強兵が一層効果的に、強力に進められ、地方長官の行政権の優位と末端官僚たる郡長の権限強化が図られた。」と。

明治十七年の謙七の印南郡長辞任について、田住豊四郎氏は「高雅なる性格は永く俗務に鞅掌（おうしょう）することを欲せず遂に謙七は官を辞して郷里山崎へ帰る(16)。」と説明しています。

他方「福原謙七翁碑」の撰文をした田艇吉は氷上郡長として明治十二年十月から二十三年二月までの在任です。謙七の在職は短かすぎます。理由については、著作に見られる謙七の日頃の主張、即ち敬神愛国の理念や仁政治国の治世観が上級の官僚と合わなかったのでは、というのが一つ。第二には、後に見るように、文部大臣大木喬任（たかとう）の題字が書かれた謙七の著書、品川家に保存され今は国会図書館所蔵の謙七が書いた内務大臣品川弥二郎宛ての二通の書簡等、謙七が国レベルの高官を知己としていることへの敬遠とか、が考えられますが、今となっては調べようがありません。

儒学を学ぶなかで刻苦精励し、自らを鍛え上げた謙七が明治新政府の地方官僚として一時期、栄進の道を歩んだことについては、土田健治郎(17)の次の指摘がよく本質を突いていると思われます。儒者に共通な能力として、「思考訓練の厚み」「知の厚みと柔軟さ」があるというのです。謙七の二十を超える著書はこの指摘が正鵠（せいこく）を得ていることを示しているように思われます。

註

(12) 兵庫県史編集専門委員会『兵庫県史』第五巻　九七七～九八〇頁　なお、飾磨縣では四十前後の学区取締が任命され、一人で二十～三十の小学区の学事を担当しました。

(13) 兵庫県教育史編集専門委員会編集『兵庫県教育史』兵庫県教育委員会　四九～五八頁

(14) 明治十二年（一八七九）一月八日郡町村統制法後の印南郡発足

(15) 大石嘉一郎「地方自治」岩波講座日本歴史十六巻一九六五年版二四七頁

(16) 田住豊四郎『前掲書』　五〇七頁　鞅掌―忙しくて暇のないこと。

(17) 土田健治郎『江戸の朱子学』筑摩書房二〇一四年版二三〇～二三五頁。これに加えて、「四書五経などの厖大な漢籍を記憶しそれを随時活用する能力」を考えたい。

第四章　ふるさと山崎で、教育・産業の振興に努めた時代

この時代は明治十七年（一八八四）から明治三十六年まで、謙七の四三歳から六二歳までの壮年期です。謙七は郷里山崎に住み、地域の教育や産業の発展に汗を流し、新しい時代を支える若者を一人でも多く育てることこそが自分の天命であるとする、節義と気概に満ちていました。田住豊四郎氏は「名利を負わず、聞達を求めず、旧友の栄達を見るや、雲煙過眼唯一、意、国家を念ふ」(18)時代であったと述べています。

明治十七年に山崎町出水町に私塾「靖献義塾」を興し、青少年の教育に務めました。ここで学んだ、阿曾準一は三河村村長・郡参事会委員として地域の振興に貢献しています(19)。謙七はこの塾で教える傍ら、各地を遊説し日本の内政と外交政策について熱く語りまし

た。その主張の一端は『教憲衍義』等、謙七がこの時代に著した書物によって知ることが出来ます。また、これらの書物の奥付には年月日・印刷所や、靖猷義塾、謙七の住所等が記され、小稿はこれらに多く負うところがありました。

次に、産業振興面での働きですが、たつの町での元内務大臣品川弥二郎演説会の開催があります。これは、日清戦争時、用務で出張帰途の元大臣を謙七達が招請した殖産興業の講演会でした。これに感銘を受けた富栖村の小林善太郎は直ちに大和に至り、造林法を研究し、且つ同地方の状態を見て大いに得る處がありました[20]。謙七の活動は地域でも評価され、山崎町内の碑文を頼まれた数も十指に余っています。

註

(18) 品川弥二郎は駐独日本大使を経て内務大臣、田艇吉は氷上郡長・衆議員議員、田健次郎は逓信大臣・台湾総督

(19) 田住豊四郎『前掲書』五一五頁　南光町中三河には阿曾準一が過ごした広い屋敷跡が松の巨木と共に残っています。

(20) 当時の山林価格について、大和は最低価格壱反歩十五円で、宍粟郡は僅か三十銭でした。経営改革の結果、面積は殆ど一千町歩、植込樹木数百万本に達しました。

おわりに　晩年、大阪時代

明治三十六年（一九〇三）謙七は六二歳。一切の公事を断ち、大阪上福島出入橋西詰に寓居して著作と吟詠に耽ることになります。それは奇しくも孔子が「六〇にして耳順（みみした）がう」[21]と述べた年齢を少し超えた歳でした。この年、対露強硬論は東大の七博士意見書を機に広がり、日露開戦前夜の騒然とした時代でした。この九年後、大正元年山崎に電灯が灯り商店街が明るくなります。

大阪での謙七は胃病を長く患っていましたが、灸治療を受けた処、効きめがあり胃病が完治してしまいました。これに感動し、鍼灸術を学び、許可を受け施術をした所、多くの患者がその効能の恵みを受けることとなりました。この時、謙七は灸の著述書『灸の光　第一編・第二編』等を発行しています。

大正時代に入り、謙七の疾風怒涛の時代も終わり、穏やかな健康に恵まれ、日本歴史学会の重鎮、重野安繹（やすつぐ）との交流を楽しみ、鍼灸術によって人々の病の軽減や治療に努めました。

大正十三年二月六日、謙七は八四歳で天寿を全うしました。十月に当時としては珍しい讃岐広島産青木石を使った「福原謙七翁碑」は発起人二〇人、敬慕者八八人によって建立されました。今も、最上山公園に登る道筋に、往古の形のままで、南面（なんめん）してはるかに町家を見下ろしています。

石碑は今日も私達に、謙七の歩んだ人生の段階[22]、人の道、歴史への係わり方など多くの事を語りかけています。

(註)

(21) 『論語』為政編第四章

(22) 人生の段階については、五木寛之の『人生の覚悟』、山折哲雄の『文藝春秋十月号』二〇一七年の「林住期と遊行期」等多くあります。

参考文献　横尾謙七『皇朝靖猷遺言』明治六年版田中太右衛門等出版
『印南郡誌』、『姫路市史』、『兵庫県宍粟郡誌』、『山崎町史』など、
兵庫県HP：年表幕末篇～昭和篇

因果はめぐる

浅田耕三

『太平記』は厖大すぎてなじみが薄いが『平家物語』は手頃なので時々、ひっぱりだして読んでいる。

寿永三年（治承七年、一一八四）二月七日、一谷の合戦で平家は鵯越の奇襲をうけて破れ、陣屋に火をかけられる。

かくて須磨海岸を敗走する平家の公達に源氏勢はおそいかかり、平家方は次々と討ち取られていった。

熊谷直眞に討たれた笛の名手の平敦盛はまだ一七歳の少年。『千載集』に「さざ波や志賀の都は荒れにしを・・・・」の歌を遺した平忠度。琵琶の名手としてきこえた平経正。父の平知盛が敵勢に押し包まれて討たれそうになっているのを見て決然とその中に飛び込んで自らは打たれた平知章等々、この合戦で討たれた平家の將は合せて一〇人、その一〇人の首級が合戦の五日後に京の都に送られてきた。「巻十　首渡」の段である。

源氏の大將源範頼、義経兄弟は早速内裏へ伺候し、後白河上皇にこれらの首級を、西洞院大路を北へ向かってひき回した上獄門に懸けたいゆえ、その勅許を得たいという。

上皇はあまりの申出に驚愕し、さような無法はまかりならんとつよく反対したが、兄弟は頑としてひき下がらずあくまで要求を通そうと食い下がった。根負けした上皇は一たん兄弟を下がらせ、側近の太政大臣、大納言らを呼んで意見を徴した。

「かつて卿相（公家）の位にあった方の遺骸を衆目にさらした例はこれ迄にありません」「み首級はいずれも前の帝安徳天皇のお血筋の方々であり、さような不遜きわまる暴挙は決してお赦しになってはなりません」

こんな側近たちの意見をきいた上で上皇は兄弟を召し、あらためて不聴許の旨を申し渡された。すると二人は「保元・平治の乱以来平家はわれら源氏の仇、その仇の首をひき回すのに何のはばかりがありましょう。」と私怨をむきだしにして言い張り、いくさ場の興奮そのままの口調で上皇にせまった。

保元・平治の乱は、当時の日本支配層の様相を一変させ武家階級の力が飛躍して、後白河院といえども二人を抑えることは容易でなかった。

かくて寿永三年二月一三日、平清盛の弟や甥や孫たち、一谷の合戦で討たれた一〇人の平家公達の首は都大路をひき回され衆目に晒されて左獄の棟の木にかけられ、二重三重の辱めをうけた。

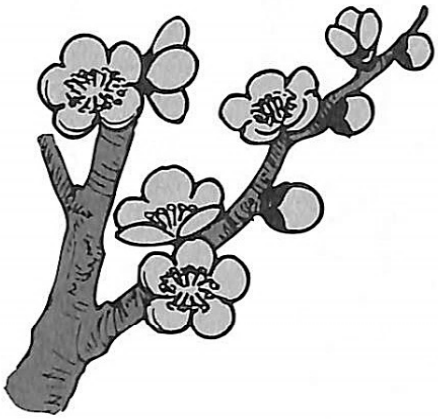
この「首渡」の絵巻は現存しないが『平治物語絵巻』の「信西（しんぜい）の巻」の絵は今に残る。藤原隆信の筆になるこの絵巻は、甲冑姿の四人の武士の真中の一人が薙刀の先に信西の坊主首を括りつけて持ち、他の三人がそのまわりを護衛役として歩く。

四人の後方にはやはり甲冑姿で美々しく着飾った二〇騎ばかりの武士団がつづく。大路には見物の牛車があふれ、その車の近くに直衣や狩衣姿の身分のある者や水干姿の庶民、折絵帽子に素襖をまとった武士の姿が見える。

牛車の前には牛飼童がいてその車の中は姿がみえぬが貴なる女性

たちが乗り合わせ、簾越しに信西の首を見物しているのである。
まるで祭のようなにぎやかさだ。
『平家物語』も巻六ぐらい迄は、清盛と平家一門の、たとえば「小督」などに専横や奢りが目立つが、しかしそれは何となく愛嬌が感じられる。けれど源氏のそれは陰湿であり非情で、何一つ救いが感じられない。
この範頼、義経兄弟もその兄の頼朝の子たちも、行くてには残酷無情な運命が待ちうけているのだ。
因果はめぐるといったところか。

参考資料　日本古典文学全集「平家物語」
岩波文庫ワイド版「平家物語」



浅田耕三先生
兵庫県ともしびの賞を受賞

平成二十九年十二月一日（金）に兵庫県立美術館において、浅田耕三先生が平成二十九年度兵庫県ともしびの賞を受賞されました。
ともしびの賞は、地域社会にあって長年にわたりひたむきな努力を続け、地域の文化の向上に貢献して、その活動が著しい個人又は団体を表彰する賞です。
浅田先生は、永年にわたり歴史小説の創作や二〇〇回を超える古典を読む会の講師などに取り組むとともに、活動を通じて文学の魅力を発信するなど地域文化の向上に尽くされました。
山崎郷土研究会の会報部員でもあり、山崎郷土会報に多くの草稿をいただいています。
これからもご指導と浅田先生のさらなるご健勝でご活躍されますようお祈りします。

「山崎歴史郷土館」（一）

◎郷土館で山崎の歴史旅行をしませんか◎

河本雅視

一、山崎町の歴史（縄文・弥生・古墳時代）

山崎町にはいつ頃から人が住み着き、生きていくために、どんな生活をしてきたのでしょう。そのことを知ることが出来る資料が山崎歴史郷土館に展示してあります。その展示資料を見て、郷土山崎町の素晴らしい歴史を想像しながら、歴史旅行はいかがでしょうか。

（展示資料は時々入れ替わっていることもありますのでご承知おき下さい）

①縄文時代（紀元前の一三、〇〇〇年頃～紀元前三〇〇年頃）

縄文時代の宍粟市は、『山崎町史』によると、山崎町より以北の千種町の高地部から紀元前六、〇〇〇年以前の縄文時代早期の遺物が発見されています。山崎町では、発掘調査によって、田井の遺跡から、紀元前二、〇〇〇年頃の縄文時代後期の土器片、菅野遺跡（青木）から紀元前一、〇〇〇年頃の縄文時代晩期土器片、鹿沢からも同じ晩期の甕棺（かめかん）が出土し、郷土館に展示されています。

住居跡については長らく不明でしたが、平成の初め頃、与位の高尾でほ場整備に伴う発掘調査によって竪穴住居跡が確認されたことから、山崎町でも縄文時代から人が住み、集落が形成されていたことが分かりました。

その与位高尾遺跡から発掘された資料を郷土館で見ることが出来ます。

出土遺物には、縄文土器・石鏃（せきぞく）・石皿・炭化した木の実などがあり、住居跡には石で囲んだ炉が残されて、火を使った痕跡もありました。当時の生活が伺えます。

＊　縄文土器とは、器面に縄目文様のある土器のことであり、縄文土器が製作・使用された時代を縄文時代と言います。（地方により異なる文様があります。）

土器の発明により、煮る、蒸すなど食文化に大きな変化をもたらしました。

＊　石鏃（せきぞく）とは、石で作った矢尻のことで、四国の讃岐などで採掘される硬質の讃岐石＝サヌカイトとか、また隠岐の島などで採掘されるガラス質の黒曜石から作られています。加生から出土したサヌカイト製ポイント＝尖頭器（せんとうき）も展示されています。（尖頭器は槍の穂先のこと）

縄文時代はこれらの道具を使って狩りをしていたのでしょう。

②弥生時代（紀元前三世紀頃～紀元後三世紀頃）

弥生時代の開始については最近の研究によって少し遡るようですが、

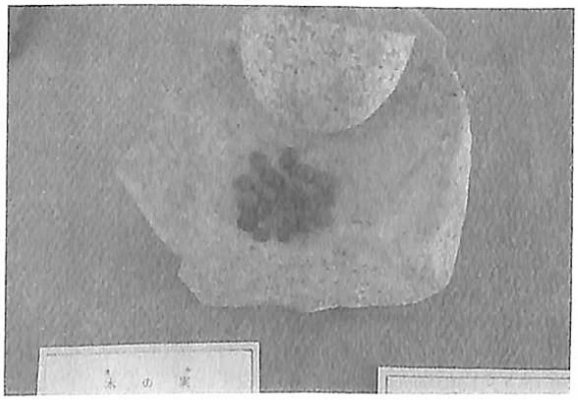


写真１　石皿と炭化した木の実

この時代は、稲作文化や銅・鉄などの金属文化が、そして、それらの技術を持った人々が、中国大陸から、或いは朝鮮半島を経て、日本列島へやって来た時代です。

弥生時代の終わり頃、列島内の諸国は、邪馬台国の卑弥呼を女王として共立し、混乱が収まり、国を統治したということです。

西暦二三九年には、中国の魏王（ぎおう）から卑弥呼に「親魏倭王」の称号と金印・銅鏡百枚が送られています。

山崎町近辺でも弥生時代には人々が次々と集落を営むようになり、弥生時代の住居跡等遺跡が各所で発掘されています。

とくに、昭和三十五年、青木の小高い山を開墾中に発見された青木銅鐸（弥生時代中期・兵庫県指定文化財・文化庁所有）が郷土館の中央に展示されています。

写真２　青木銅鐸　所有者　文化庁

銅鐸は弥生文化を象徴する日本特有の青銅器です。弥生時代の終わりと共に土中に埋めるなどして姿を消すという不思議な存在ですが。研究者によると稲作集団が稲作などの豊作を祈る祭りに祭器として使用されたと考えられています。それにしても今から二千年ほど前の人々により、これだけの物が製作され、豊作祈願に使われたと言う事ですが、この地域では青木銅鐸を共有する稲作集団が住んでいた事も想像できます。

また、田井からはほ場整備に伴う発掘調査で銅鐸型土製品が出土し、出土状況の写真と共に展示してあります。銅鐸型土製品の出土は珍しく、たいへん貴重な資料といえます。銅鐸型土製品は私的に作られたのではないかと言われていますが本当のことはよく分かっていないとの事です。

山崎町地域の集落を、発掘された資料から見てみますと、現在の山崎文化会館あたりをはじめ、門前・上寺・横須などから出土した弥生時代の土器類の展示を見ることができますが、これらの資料を見て、弥生時代、つまり、今から二〇〇〇年前の紀元の頃の生活を想像してみてください。

＊　弥生の名称は、明治十七年にこの時代の土器が発見されたのが、東京府本郷区向ヶ丘弥生町であったことからそう呼ばれるようになりました。

③古墳時代（三世紀末～七世紀後半）

古墳時代は三世紀後半頃から七世紀末頃までですが、四世紀中頃には大和政権の統一が進み、九州北部から東北地方の一部にまで支配を及ぼしています。また古墳時代中頃には大山古墳（仁徳天皇陵に治定）などの巨大な前方後円墳が造営されています。

山崎町に於いても地域を代表する古墳が金谷にあります。金谷山部古墳と言いますが、古墳時代中期の古墳で、兵庫県指定史跡」になっています。長径約二十メートル・短径約十四メートルの円墳です。

また、山崎東中学校建設に伴う発掘調査が行われた時、そこに三津群集墳と呼ばれる古墳が見つかり、一号墳から五号墳までの五基の古墳が発掘されました。

郷土館にその古墳群の調査状況の写真と、横穴式石室に納められていた遺物のうち、装身具・鉄鏃（てつぞく）・鉄剣・太刀（たち）・土師器（はじき）・馬具・須恵器（すえき）などが展示されて、現物を見ることができます。当時の豪族たちの生活を想像してみて下さい。また、遺物をよく見ると、鉄製の武器が多くなり、武力を背景とした地域支配の情勢を考えることも出来ます。騎馬軍団も朝鮮半島の影響でこの頃整えられたと言われています。

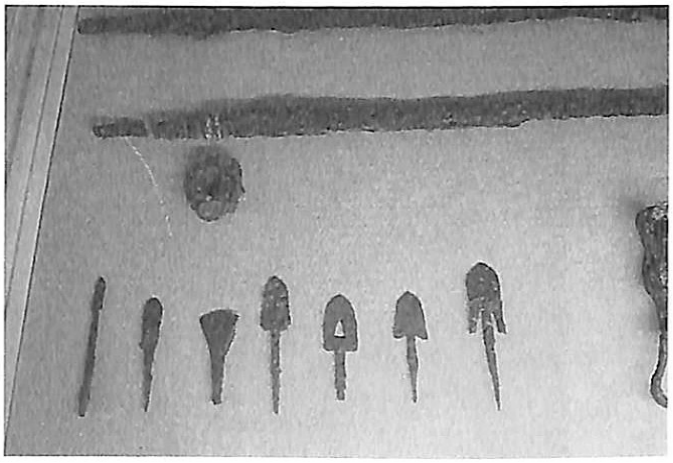


写真３　太刀とその鍔、鉄鏃

また遺物の中に太刀がありますが、その鍔（つば）をよく見ると銀をはめ込んだ象嵌（ぞうがん）が認められます。このような太刀の持ち主を考えますとその権力の大きさも想像することができます。

＊象嵌とは金属・陶磁器などの表面に金銀などをはめ込む工芸技術

＊土師器とは弥生土器を継承し、古墳時代に作られた土器のことで焼く温度は七、八〇〇度、赤褐色の素焼きのこと

＊須恵器とは古墳時代朝鮮半島から渡来した工人達により登り窯で一〇〇〇度以上の高温で焼かれた硬質の焼き物（青灰色）

山崎町には城下の金谷山部古墳（中期の円墳）の外、宇原の古墳群、（後期の円墳）、そしてまた、横須、五十波、矢原、金谷、加生などにも後期の古墳が築かれています。

ちなみに昭和五十二年発刊の『山崎町史』によると　宍粟の古墳の数は、一宮町五四基、山崎町四四基、波賀町七基、千種町一基となっておりますが、最近は新しく発見された古墳もあり、その数も増しています。

古墳の数からみても一宮町、山崎町にはこれらの古墳を築く権力を持った豪族達が住み着いていたと推測できるのではないでしょうか。

展示資料は歴史のほんの一部ですが、皆様の知識で、縄文・弥生・そして現代へと山崎町の歴史を大きく推理して下さい。

青年団と盆踊り

伊藤一郎

前号で記した伊藤太郎平は明治二十五年（一八九二）に亡くなり、その子親彦は、山崎町内のふとん店に勤めるとともに篠陽小学校（今の山崎小学校）の卒業生の仲間と語り合い、山田村青年会を結成しました。明治二十四年に徳富蘇峰が『国民之友』に「書を読む遊民」を発表。地方の青年に実業教育を施し、生産社会に参加させるべきと主張。読者の山本滝之助は、日清戦争のあった明治二十八年に『田舎青年』の著述に取りかかり、この書で田舎青年会の連合を提案しました。各地において青年団体が興され、地域の祭礼・行事の継承とともに読書会を行い、小学校教育の補助の役割を果たしました。

江戸時代には、若者組・若連中などと呼ばれていた若者の団体があり、起源は室町時代もしくは、それ以前にさかのぼるともいわれ、これら集団は若者たちの社会生活の中から自然に生れたものです。親彦の時代は、江戸の自給自足的な村落共同体が次第に崩壊し、若者制度が亡くなっていました。しかし、明治の地方自治制度の確立と資本主義国家の基礎固めにより、新時代の精神をつぎこんでその復活を図ろうとしていました。兵庫県下では、明治十五年（一八八二）に青年会が生まれ、明治二十三年には山本滝之助の呼び掛ける「好友会」が結成されました。山本が官僚や軍部に青年会の必要性を訴えたことにより、明治三十七・三十八年の日露戦争では、出征兵士の歓送迎会などを青年会の手で行いました。この後、青年会は町村単位に改編され、自治体の長や学校長が団長となる官製青年会となり、大正十四年（一九二五）には、日本青年団が設立されました。

親彦の所属した山田村青年会では、演劇活動を盛んに行い、各地の青年会との交流をおこなったと聞いています。親彦は、日露戦争では衛生兵として出征し、多くの負傷者と共に広島の病院に無事帰ってきました。そこで妻となるキナと運命的出会いをします。キナは、大陸で戦死した夫の赤子を抱えて広島市内の親戚に身を寄せていました。親彦は、除隊すれば山崎でふとん店を開業する予定でしたのでキナを必要としていたのです。出水町にてふとん店を開業すると、さっそく、近くの露地にて盆踊りを開催します。彼は、須賀沢村や山田村の仲間と相談し、盆踊りの最終日を宍粟橋で行うことを決め、実行します。当時の盆踊りは、夜川・左衛門・シャントコ・ぼんさん踊りです。地域の盆踊りが終わると三味線の囃子でぼんさん踊りを踊りながら「ぼんさん・そうだろ・そうだろ」と囃子たてて宍粟橋まで行き、夜が明けるまで踊ったそうです。この当時の盆踊りは、男女の出会いの場でもあったようです。

その頃の山崎町は高瀬舟の発着点で、物品の集散地として栄え、飲食する店や旅館が立ち並び、歓楽街（地獄谷）には芸子が二百人から居たと聞いています。私が十九歳の頃に知り合った鷹巣の老人のお話では「若いころ、子牛を売る為に山崎町の牛市に行き、子牛を売ったお金を持って地獄谷で遊び、スッテンテンになって、少女（付け馬）が家まで金を取りについて来た。」と楽しそうに語られたことを思い出します。

大正デモクラシィと呼ばれた時代の背後で、軍部の強権が増し、戦争へと突き進みます。大正十二年（一九二三）に連合青年団が誕生し、大正十三年には兵庫県連合青年団が団員十三万六七三二人で発足しました。昭和十四年（一九三九）に大日本青年団となり、昭和十六年には大日本女子連合青年団・大日本少年団連盟・帝国少年団協会と統合し大日本青年団を結成。戦時体制下の教育訓練機関となり、中央は、文部大臣、県では知事が団長に就任し、軍部の指導下に置かれました。昭和二十年八月十五日昭和天皇による終戦放送があり、日本の敗戦が決定しました。

伊藤親彦の子親保は、その時朝鮮で妻と共に教師をしていました。親保の弟が満鉄にいたため、ソ連による満洲襲撃を早く察知し満鉄の職員と共にいち早く朝鮮を脱出しました。

親保は親に似て踊りが大好きで、終戦の次の年には、出水町にて盆踊りを再開しています。昭和二十年の十月には、自発的に兵庫県下で青年団が生まれ、昭和二十一年六月には、兵庫県青年団連絡事務所が開設され、昭和二十二年五月三日に新憲法施行。主権在民・戦争放棄・基本的人権などをうたい、新生中学校「六・三制」発足。昭和二十五年一月十五日には、兵庫県連合青年団結成となり、山崎町においても青年団活動が、盛んに行われていました。

私は昭和四十六年に大阪から山崎に帰り、さっそく山崎町青年団に参加しました。私も盆踊りがとても好きだったので、篠の丸青年会（旧山崎地区）に所属して盆踊りの音頭の練習を毎晩のように行い、盆には山崎小学校のグランドが踊り手でいっぱいになり、掛け声が櫓の上に反響したのを懐かしく思い出します。私が青年団を退会して間もなく篠の丸青年会が解散し、何年か後に山崎町青年団がなくなりました。

私が事務局を引き受けていた「山崎植物同好会」が平成二十九年に会員の減少により解散することになりました。今の時代は、親彦の時代の社会状況にとても似ているような気がしています。社会の急激な変化（経済活動のグローバル化や通信技術の発展と地方の過疎化の進行）により、世代間の思考が一致せず、地域の伝統的文化の継承や現在活動している社会活動が次の世代につながらない状況が生まれています。親彦の過ごした若き頃にとてもよく似ていると私は思うのです。

志賀　納　画伯の盆踊りの絵

ぼんさんおどりの歌詞

・ぼんのお月さんは　まんまるこぅてまぁるいよ（アーソダロソダーロ）
　まるでまんまるこうて　（ナーエコリヤ）　まだまるいよ
（ボンサンソーダロソーダロ）または（アオッサンソーダロソーダロ）
・坊主じゃとゆうて　首にけさかけてよ
　夜は女郎屋の　門に立つよ
○世間渡らば　とうふのように
　四角四面で　やわらかくてよ
○逢いに行く日は　日盛りさけてよ
　軒のしのぶの　ゆれるころよ
○ほかえ心移してみても　うつしてみてもよ
　いつかおまえの　ことばかりよ
○三千世界の　カラスを殺して
　お主と朝寝が　してみたいよ
○苦労する身は　いとはねど
　苦労仕甲斐の　あるようによ
○お月さまさえ　泥他の水に　・瞼上下あわせりゃ　闇に
　落ちて行く　世の浮きしずみよ　わいて出てくる　母の顔よ
○同じ日本に　男と生れ　・もはん亭主の　となりにすんで
　光源氏は　得な人よ　いつもカカアに
○はどどいつ集から拾ったもの　比べられるよ

出水町盆踊り保存会　安田　笙（安田浩三）作詩

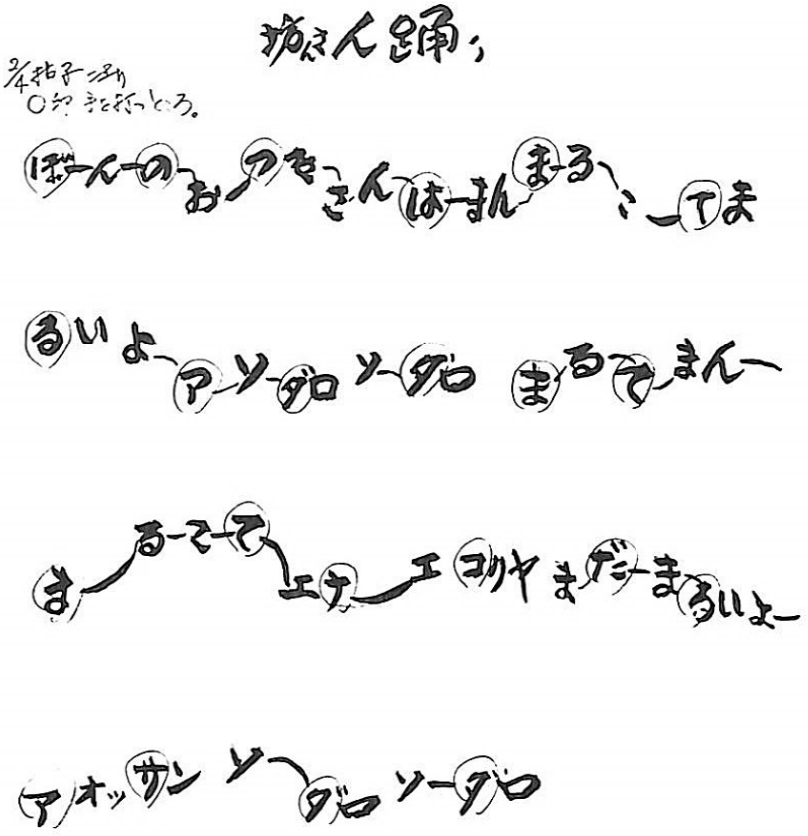
夜川の歌詞

（アラヤーアートナーノソレハヨーイトナトコショショ）
・夜川　夜振利の漁火遠く　（ソリャソレイナエー）
　きらりきらりと　鮎さえはねる
・揖保の流れの　その両岸に　川岸問屋が　にぎわいいたす
・町のはずれの　ここ地獄谷　鬼も着飾り　お粉塗って
・地獄極楽　あの世とこの世　どこにもないのが　この地獄谷
・やり手ばばあのもてなすままに　上がりこんだらすっからぴんよ
・筏流しは　度胸で流す　あわれ女郎は　その身を流す
・女郎帯とく　夜川のように　消したろうそく　つけてはならぬ
・明けのからすも　なかなかなかぬ　なけば女の　涙の雨よ
・ここに一人の　好きものありて　今宿あたりに　住まいをいたす
・高瀬舟なら　この長五郎　腕のよいのが　自慢のたねよ
・ひとりの女郎に　想いをかけて　昼も夜もと　日参いたす
・この世で添えない　二人であれば　せめてあの世の　蓮の上で
・話しまとまり　足ぬけいたす　揖保の流れに　高瀬舟
・板子一枚　たよりとなして　夫婦岩から　こぎいでなさる
・地獄谷では　大騒動よ　どこをさがせど　女郎はおらぬ
・城下過ぎれば　渡し場近い　二人をのせたる　この高瀬舟

この後の文句や「しゃんとこ」「左衛門」についての安田　笙音頭集が御入用の方は、伊藤宅（山崎町山崎４１３番地）にあります。

ぼんさん踊りの三味線譜

日本民謡正楽会　会主　坂元正俊先生編曲



ぼんさん踊りの三味線譜

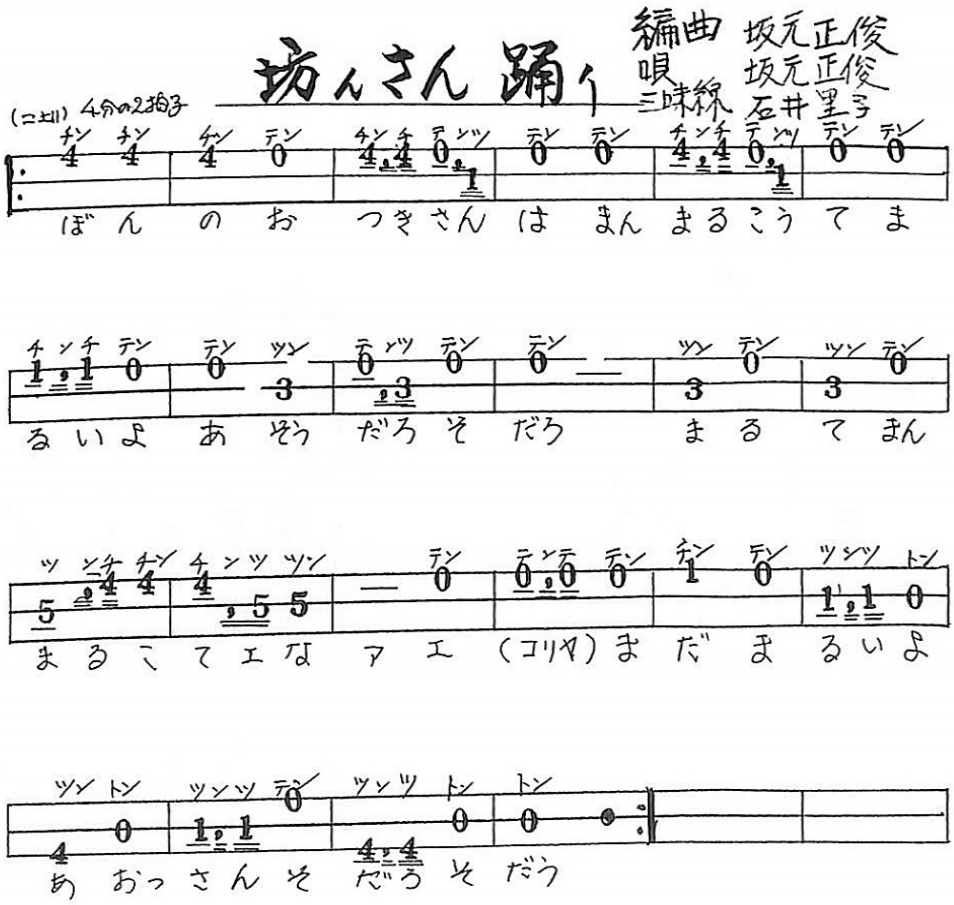
正楽会の皆さんのご協力で、ぼんさん踊りの録音テープが出来ました。唄坂元正俊先生・三味線は石井里子さん・囃子は松本哲緒さんです。また、三木雅代さんに大変お世話になりました。録音テープは、山崎郷土研究会と伊藤宅にあります。ぼんさん踊りが、どのような踊りであったのか不明です。知っておられる方は、伊藤に知らせてください。

参考文献

朝日百科日本の歴史10近代Ⅰ

朝日百科日本の歴史11近代Ⅱ

兵庫県青年団史



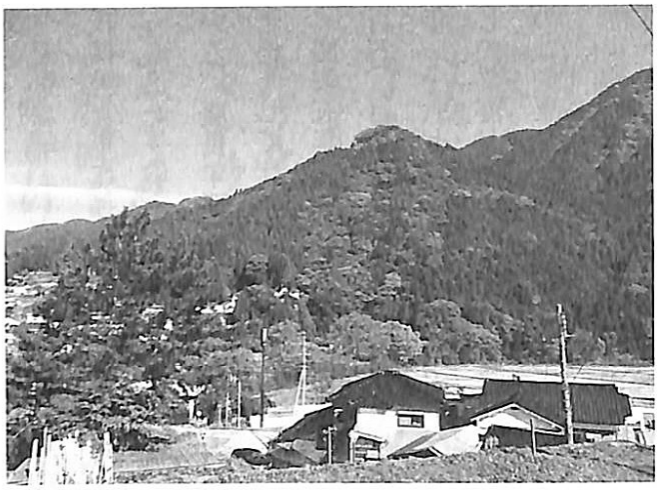
ぼんさん踊り

波賀城と城主中村氏のこと

竹内克司

因幡街道の要衝に建つ波賀城

中村氏の城は播磨の北部の波賀町上野にあり、単独峰の城山（標高三五八m、比高二二〇m）の頂上にある。西側の引原川に面したところに小山（古城）があり砦として機能したようである。城の位置は、北は因幡国（鳥取県）との国境に近く、東は三方から但馬に通じ、西は千種町から美作国（岡山県）に通じる交通の要衝に位置する。



波賀城

城跡は、主郭を中心にそれを取り巻く帯曲輪、南に数段の曲輪、石垣等が配置されている。平成四年の発掘調査によると石垣・石積や備前焼・天目茶碗の破片等の遺物が出土し、石積の技法が中世から近世の特徴を合わせ持つ貴重なもので、石垣の通路から土壁の跡が発見されていることから羽柴秀吉が播磨を制圧したときに拡張整備し北の守りの拠点としたものではないかと指摘されている。

私見では宇野氏の長水城落城後の翌年天正九年（一五八一）に始まる鳥取城攻めのための布石として山陽道から因幡への最短コース上にある波賀城と若桜鬼ケ城（鳥取市若桜町）を結ぶ兵站（へいたん）基地として利用した可能性が高いと思っている。

中村氏の出自と中世・戦国期の主な動き

中村氏は武蔵国秩父（埼玉県秩父市）中村郷が姓名の地である。

鎌倉幕府御家人で武家集団である武蔵七党の一つ秩父丹党に属し、鎌倉末期の正応三年（一二九〇）秩父より播磨国三方西荘（波賀町）に地頭として移り住んでいる『関東下知状』。「中村・皆木・大河原は兄弟三人の流れ也。皆木は中村を号し、大河原は中村を号せず。」とある『蔭涼軒日録』。

その後、後醍醐天皇による建武の新政（一三三三）では、播磨は新田義貞の所領となり、三方西荘は大徳寺に寄進された。しかし天皇による新政は続かず、足利尊氏が天皇にそむき、南北朝の時代に入った。このとき、中村氏は尊氏の有力与党である赤松則村（円心）に従っている。

赤松惣領家の四代目の満祐が起こした嘉吉の乱（一四四一）により、播磨は山名氏の所領となった。赤松氏は応仁・文明の乱を期に播磨を奪回した。

天文十一年（一五四一）尼子晴久の播磨侵入に際しては、赤松当主晴政は敢え無く逃亡し、播磨の大半は尼子氏に従った。この時中村三郎左衛門は尼子に与していたことが、尼子家臣から領地を与える旨の書状を所持していることからわかる。

天正八年（一五八〇）羽柴秀吉の播磨侵攻による宇野攻めに中村氏は秀吉軍に与している。

天正十一年（一五八三）秀吉の九州攻略には中村吉宗が参加している。慶長年間（一五九六～一六一五）には姫路城主池田輝政に郷士格として仕えている。

慶安五年（一六五二）までの間に、二百石、百石の地侍となっている。延宝六年（一六七八）宍粟藩の池田恒行が死去し宍粟藩が絶えたときの引継ぎ書類の中の『宍粟江戸両所罷在人数帳』に「五十石　有賀村地侍　中村九郎左衛門」と見えるが、それ以後の動きは不明である。

中村九郎左衛門の墓（興国寺）

中村姓の系譜

東播磨の金鑼城（加東郡河合村・現小野市）の城主の中村氏は、間島氏に従って赤松再興に尽くした中村一族と考えられる。

もう一つの系譜は承久の乱（一二二一）後、美作国弓削庄（岡山県久米郡）に移った一族に中村則久、大河原真久がいた。この二人は守護赤松政則・義村のとき美作国守護代の実権を得たが、赤松義村と宿老浦上村宗との内部抗争に中村則久が浦上に味方し、大河原氏が赤松に味方したため同族相まみえている。

永正一七年（一五二〇）則久は美作・岩屋城（岡山県旧久米町）に立て籠り、赤松軍の大将小寺則職を壊滅させ赤松を弱体化させている。

武蔵七党の武将達が残したもの

武蔵七党の武将達が西遷後に安賀八幡神社（波賀町安賀）・広峰神社（姫路市）・秩父神社（秩父市）への太刀の奉納や諏訪神社（波賀町小野）の建立によって貴重な文化財が残され、波賀町に土着し戦国の世をからくも生き延びた中村当主は地域史にその名を刻んでいる。

武蔵七党と武将たちが残したものから、彼らが遠き故郷秩父を思う心情が伝わる。

秩父神社

安賀八幡神社

諏訪神社

広峰神社

参考文献：『波賀町史』、『西播磨の中世　鳥羽弘毅』、『第五集　波賀城　藤原孝三』、『中村時之助文書と史料　中村為市』、『落穂ひろい　ふーむ』

『〇〇町はどこだ』と『国絵図』に追加

清水　哲

一　天保十二年・十三年の覚帳から

平成29年2月の会報１２８号に『〇〇町はどこだ』を載せていただいた際に、天保十二年の山崎藩国元覚帳で樽井宗右衛門らの城絵図作成事業が褒められた部分を紹介した。覚帳は武家関係の記事が多く、人々の当たり前の生活は事件でもない限り記録されない。そのなかで数カ所、庶民の生活の一端が記載されていたので紹介する。

天保十二年　閏正月二十二日の条

次のように翻刻してみたが、どうでしょうか。

一　三津庄能村役人共ヨリ伊沢川尻川奥筋
往来ニ板橋有之人馬通行仕候處雨天洪水
毎ニ右橋落往来難相成牛馬并ニ旅人難渋
仕候ニ付此度牛馬曳違ニ相成候土橋懸申度
奉存候　尤丈夫ニ仕水損無之様仕候ハバ人馬之
差支無御座候而村方之者并通行之村々
勝手ニ相成并当国一ノ宮参詣之旅人助ケニ
相成候間乍恐此段奉願上候右ニ付両河岸ニ
岩ニ而石垣仕候ハバ橋持宜御座候間当三津村之内
勧源寺山ニ而石少々切出し申度段願出候之旨
御奉行申聞差障筋も無之趣ニ相聞ニ付承届候

三津と庄能の間に伊沢川を渡る板橋を掛けているが大雨洪水の度に壊れ困っている。そこで牛馬がすれ違える土橋を掛けるために両岸に頑丈な石垣を築きたい。そのために山から石を切り出したい…という願いを藩は了承した。

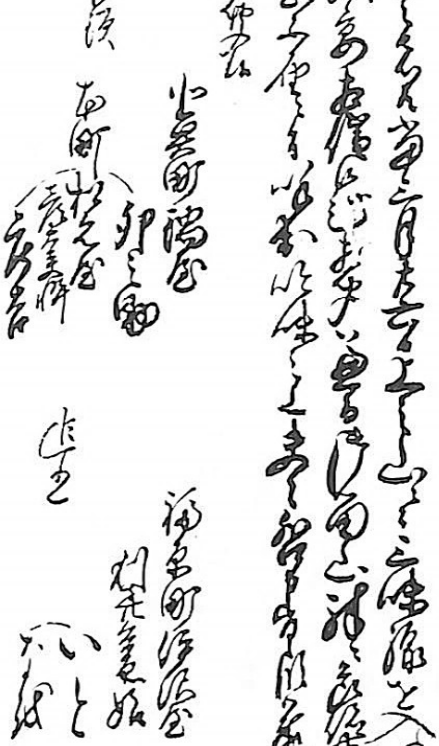
町史では

山崎町史724頁には山崎から奥筋（一宮波賀方面）についての記述がありそれを引用する。当初、出石―高所～野々上―杉ケ瀬の川東往還があったが、富士野銀山繁栄後に庄能―三津―五十波―田井の山裾を通る川西道が使われ始め、田井・杉ケ瀬間には渡し船が設けられた。しかし従来の川東道を使う人や牛馬も多く、崖道の修理費負担をめぐって争論が起こった。幕末には野々上（尼崎藩）、杉ケ瀬・五十波（三日月藩）、田井（安志藩）と入り組んでいたため大

坂谷町代官所の出番となった（一八二三年）。

尚、池田数馬の時期の城絵図には。今の富土野町から北に伸びる道に「五十波海道」と記入されている。

天保十三年五月十日の条



一　左之者共当三月廿六日上之山ニ而三味線を入候而
酒宴相催候趣相聞兼而御留山殊ニ□□中
甚不届ニ而呼出吟味之上夫々咎申付候段御奉行
申聞入候

北魚町鍋屋　福原町伊沢屋
卯之助　利喜兵衛娘
手鎖　本町松元屋　追込　いと
彦太夫忰　庄吉　なを

上之山（最上山？）は藩の管理（留山）だったので許可なく立ち入り騒いで罰せられたのか。二行目末尾の「□□中」はあれこれ悩んだが、「節倹中」でどうだろうか。当時も倹約令が出ていた。

天保十三年七月二十七日の条

これは岸田村の栄蔵が村内の川でカニカゴ（蟹篭）を仕掛けたいという願いである。運上（許可料）は必ず支払うというので、了承されている。　※尚、図書館に寄贈されている「山崎藩国元覚帳」を借りて読み、今後もこのような記述を紹介したいと思う。

二　新宮神社蔵　正保播磨国絵図について

前回の会報で国絵図について調べたことを載せていただいた。正保の国絵図は明暦の大火の際の江戸城炎上により焼失したが、多くの控え図や写しが残っているとのことである。新宮神社蔵の正保播磨国絵図もそのひとつ。昨年秋に龍野市歴史文化資料館で「揖保川流域のサムライ」という展示があり、そこで私はその正保国絵図の実物をガラス越しに見た。宍粟郡の部分を見上げると首がしんどくなった。木ノ谷から島田へのカーブには「此印所五町難所」、安積から生栖にかけては「此ヨリ一里余難所」、葛根から三河にかけては「坂あり」、船越から下河野にかけては「二町難所但馬道有」と書かれてあった。国立公文書館のデジタルアーカイブで見られる元禄・天保の国絵図にはこのような特記はない。

播磨国風土記宍禾郡比治里一考察

片山昭悟

これまで「播磨国風土記」の宍禾郡（しさわのこおり）については、平成二年頃に植垣節也先生や建部恵潤先生よりご指導をいただいて現地調査をしてきたが、比治里（ひじのさと）（註1）についても地元の金谷であり、関連する地でもあり、興味をもっていた。

長年の調査に基づいて、小稿を紹介させていただく。

比治里の範囲については、上比地、中比地、下比地から金谷、宇原、川戸、平見、城下地区の南部も入るものと考えられる。

その中で、比治里の庭音村（にわとむら）（註2）と奪谷（うばいだに）（註3）についてはどこか不明であるが、庭音村については、比治里であることには間違いない。

井上通泰氏の『播磨國風土記新考』（註4）には、敷田氏標注（註5）に庭音村、式に庭田神社あり。此地か、井上通泰氏は、庭田は庭音の訛（あやまり）とすべしとされている。

一宮町能倉の庭田神社は、「延喜式」の式内社であり、平安時代にはお宮が存在していた。ここには「ぬくい川」という川が神社付近を流れ、御神酒の伝承の地であることから日本酒の発祥の地とされている。

「播磨国風土記」の宍禾郡比治里の庭音村は、比治里が当時一宮町まで飛び地であるとは考えられないと思っている。比治里内であり、川音村の次に庭音村は記載されていることからみても城下のどこかにかつて存在していたもの考えられる。庭音村は、私見ではあるが、城下の岩田神社から式内社雨祈神社周辺ではないかと考えている。

稲舂の岑（いねつきのみね）については、国見山から通称の大ずっこで南面する観音山か揖保川の西に位置する野の稲垣神社からみて川戸山から東方の岑ではないかと思っている。

奪谷については、葦原の志許乎（あしはらのしこお）の命と天の日槍（あめのひぼこ）の命と二柱の神が、この谷を奪いあったことから奪谷という。奪いあったことによって谷の形が曲った葛のようであるとされる。現在どこかは不明であるが、比地保キから城下をみると川戸山の岑があり、谷の形が曲った葛のようであると考えることも一つであると思うが、奪谷は庭音村であることから城下の岩田神社周辺からみると国見の森から金谷字石ケ谷かあるいは、須賀沢の谷を奪谷ではないかとも考えられる。庭音村と稲舂の岑、奪谷については、いずれも比治里であり、今後の調査と研究課題である。

＊註1　奈良時代の『播磨国風土記』によると、宍禾郡（しさわのこおり）は孝徳天皇の時に揖保郡から分かれ、比治里（ひじのさと）は、里長の山部比治から名付けられたとされる。比治里には、宇波良（うはら）村、比良美（ひらみ）村、川音（かわと）村、庭音（にわと）村、奪谷（うばいだに）などの地名が記されている。宍禾郡（しさわのこおり）は、比治里はじめ、高家里（たかやのさと）、柏野里（かしわのさと）などの地名や伊和大神と天日槍の伝承が記載されている。

＊註2　庭音村については、川音村の次に記載されている。

庭音村。〔もとの名は庭酒であった〕大神の御食糧が、濡れてかびが生えた。そこで酒を醸（かも）させて、それを庭酒として（神に）献（たてまつ）って宴会をし

た。だから、庭酒村という。今の人は庭音村という。

＊註3　奪谷についても、庭音村に記載されている。奪谷。葦原志許乎の命と天日槍の命と二柱の神が、この谷を奪いあいなさった。だから、奪谷という。その奪いあったことによって、谷の形が、曲った葛のようである。

＊註4　井上通泰『播磨國風土記新考』大岡山書店昭和六年（復刻版臨川書店）（p356）

＊註5　敷田年治『標柱播磨風土記』明治二十年（一八八七）（p355）

参考文献

井上通泰『播磨國風土記新考』大岡山書店　昭和六年（一九三一）（復刻版臨川書店昭和六十一年（一九八六）

秋本吉郎校注『風土記』日本文學大系2岩波書店　昭和三十三年（一九五八）

植垣節也校注・訳者『風土記』新編日本古典文学全集小学館一九九七

【庭音村補足説明】

秋本吉郎校注『風土記』によると、（p318～319）

校注八　遺称なく所在地不明。式内社庭田神社を遺称とし、その社地（一宮町上野田の能倉）に擬する説（敷注・新考）があるが、地理があわない。

井上通泰『播磨國風土記新考』によると、（p356）

宍粟郡誌に　式内村社庭田神社　染河内村能倉にあり。古傳に大名持大神天下を作り訖（おわる）へ給える時其の大舉（たいきょ）に興（よ）れる諸神を招集へて酒を釀し山河の清庭の地を擇（えら）びて慰勞のため饗應し給へし靈蹟なるにより社殿を造勞し奉りて其の御魂を鎭め祭れりといふ

とありここに云へると事梢相似たれば庭田は庭音の訛とすべし。更に案ずるに染河内村と戸原村との間には神戸・神野・河東の三村（本書の名稱にていえば伊和・安師の二里）あれば庭田を庭音の訛とし從ひて庭音を今の染河内村能倉とせむに地理かなはず。

奪谷（p318～319）校注一二　遺称なく所在地不明。新考は前条庭音村と同地（一宮町内）に擬し、御方里の記事の錯簡とするが従い難い。

庭酒　（p318～319）校注一一　神に供える酒。

稲春岑（p319）校注一四　遺称なく所在地不明。

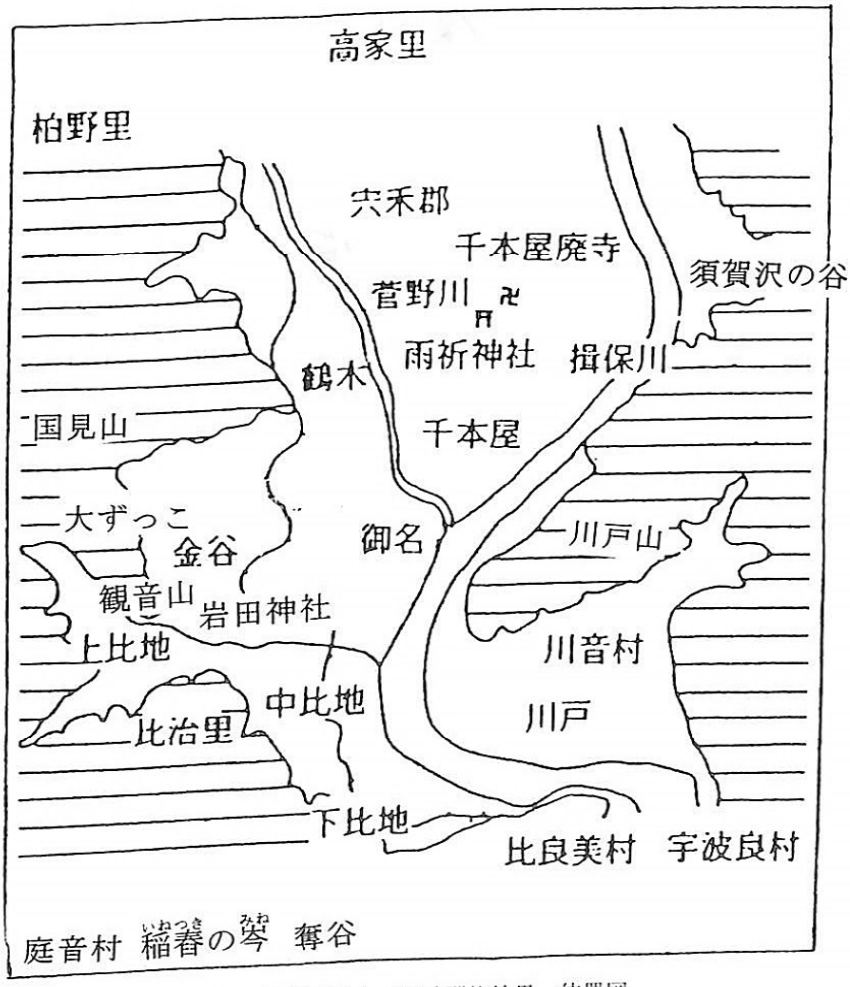


図　播磨国風土記宍禾郡比治里　位置図

平成29年度山崎郷土研究会研修旅行

岡山県高梁市の備中松山城とベンガラの吹屋を訪れる

研修部

平成二十九年九月二十四日（日）、平成二十九年度山崎郷土研究会の研修旅行で、岡山県高梁市の備中松山城と吹屋を訪れた。参加者は三十八名であった。宍粟市役所前を午前八時に出発し、山崎インターから中国縦貫自動車道を一路高梁市へ。

備中松山城は、国の重要文化財（史跡）で、標高四三〇ｍの臥牛山に位置することから備北バスでふいご峠まで行き、それから徒歩で天守が唯一現存する山城の備中松山城へ登る。

大手門から二の丸を望むと岩盤上に築かれた石垣は迫力があった。天守を見学して歩いて約一時間の見学であった。ふいご峠からはバスで観光駐車場へ、その後、高梁川で使用されて保存されている高瀬船や市内の武家屋敷など城下町を見学し、高梁国際観光ホテルで昼食、午後は標高五五〇ｍの江戸時代から明治時代に銅山やベンガラで栄えた吹屋ふるさと村の町並み保存地区（国選定重要伝統的建造物群保存地区）を訪れ、重要文化財の旧片山家住宅や郷土館など約二時間散策する。

帰りは午後四時三十分に新見インターから中国縦貫自動車道で、山崎着は午後六時三十分であった。今回の研修旅行で参加された方は、「備中松山城と吹屋も訪れてよかった。」との感想を述べられていた。

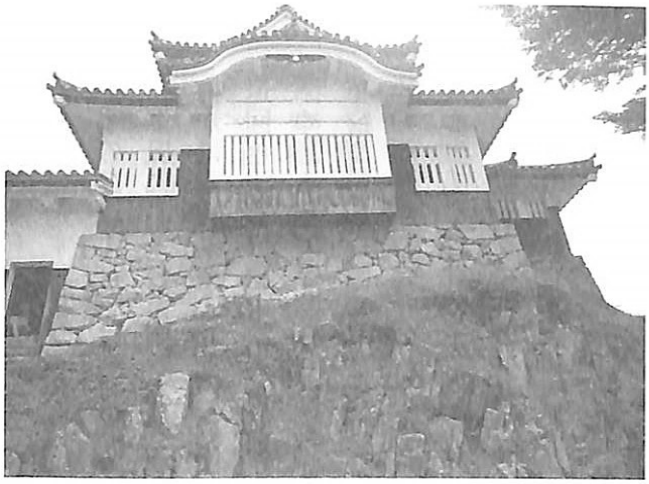


写真１　備中松山城（天守閣）

写真２　備中松山城（岩の上に城）

写真３　ベンガラの吹屋の町並み

会員・家族の文芸

◎冠　句

文字を書く　平和の二字を後世に　宇田　幸夫
米を研ぐ　新米香る塩むすび　宇田　幸夫
文字を書く　一行だけでも今日の事　大谷　志路
米を研ぐ　二人三合日々の飯　大谷　志路
文字を書く　パソコン壊れ青い顔　坂本　忠彦
米を研ぐ　料理考えボケ防止　坂本　忠彦
文字を書く　今年話題とお坊さん　実友　勉
米を研ぐ　妻の手ほどき今感謝　実友　勉
文字を書く　タラヨウの葉をながめつつ　嶋津　千里
米を研ぐ　美味しい顔を浮かべつつ　嶋津　千里
文字を書く　心無にして自由です　高井　怜依
米を研ぐ　心も一緒に磨きます　高井　怜依
文字を書く　手に持つ道具タブレット　谷笹　まや
米を研ぐ　子らの集いでホッとする　谷笹　まや
文字を書く　飛行機雲で青い空　為国真佐行
米を研ぐ　自然の恵み感謝する　為国真佐行
文字を書く　墨の香りに包まれて　三木ひづる
米を研ぐ　母の姿が目に浮かぶ　三木ひづる
文字を書く　子供の席で冠句会　中瀬　公三
米を研ぐ　一粒までも大切に　中瀬　公三

◎俳　句

笑ふ泣くそれぞれの冬羅漢仏　京屋　伊助
再読の一茶評伝年新　京屋　伊助
永き日を思ふ存分空の下　杉山美保子
秋晴れや頂上目指し一歩づつ　杉山美保子
ちらちらと雪にそまりし紅の花　高井　麗子
初灯り無事に着きたや黄泉の国　高井　麗子
健やかを先ず念じつつ初日記　田中　良子
拍手のひびく宮居は淑気満ち　田中　良子
そよ風にふふむ雪割草の野辺　田中　慶英
梅かほる峠茶屋より瀬戸の海　田中　慶英
遠回りする満開の桜の道　鳥羽チエノ
閉め忘る木戸を鳴らして春一番　鳥羽チエノ
草餅や野山目睡めし喜びに　三浦　ゆき
酔芙蓉浮世の憂いありぬべし　三浦　ゆき
残る虫鳴くたび闇を深くせり　里見　和樽
木々に風木々の彼方に秋の雲　里見　和樽
若き日のごとく産土初詣　高井　智代
城山を真白に染めて北時雨　高井　智代
神域のしじまゆさぶる秋祭　速水美知代
人柄の匂う絵手紙栗の笑み　速水美智代
流さるるままのひと日や日脚伸ぶ　宗平　圭司
観音の千手しなやか春きざす　宗平　圭司
せせらぎのしぶきを浴びて猫柳　矢野登次郎
風やみて畦のまにまに土筆でる　矢野登次郎

※次号に掲載する文芸作品の投稿をお待ちしています
あわせて新会員を募集しています

事務局だより

平成三十年度郷土研究会総会のご案内

本会の総会を左記により開催いたしますので、会員の方々はお繰り合わせのうえ、是非ご参加下さるようご案内いたします。

記

日時　平成三十年四月十五日（日）午後二時より

場所　宍粟防災センター　四階　研修室

内容　事業報告、会計報告　事業計画、予算審議、その他

アトラクション　ＤＶＤの鑑賞（予定）

なお、このお知らせをもって、総会のご案内とさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

編集後記

『山崎郷土会報　第一三〇号』をお届けします。

第一三〇号は、大谷司郎会長の明治以降の山崎の年表（三）、山崎闇斎共同研究グループの福原謙七について、そして、このたび平成二十九年度兵庫県のともしびの賞を受賞された浅田耕三さんの因果はめぐる、河本雅視さんの山崎の歴史がわかる山崎歴史郷土館（一）について、伊藤一郎さんの青年団と盆踊り、竹内克司さんの波賀城と中村氏のこと、清水哲さんの『〇〇町はどこだ』と『国絵図』に追加など皆様のご協力により充実した号になりました。

次回は、地域で取り組んでおられることや、神社、寺院、史跡等についての原稿を募集しますのでよろしくお願いします。

今年は戌（いぬ）年です。十二支の十一番目です。

皆様にとって犬のように飛躍の年になるよう祈願します。

なお、本文中の原稿については、原文を尊重して編集しています。

（片山昭悟）

パンフレット・デザイン広告
名刺・封筒・伝票・新聞広報誌
ポスター・案内状・シール等

(有)稲田印刷

〒671−2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL(0790)62−0254 FAX(0790)62−4764

まごころを伝えます。

一献献上　品質本位

播州一献

地酒

山陽盃

確かな品質と味わい。

SANYOHAI
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎28

TEL.0790(62)1010　FAX0790(62)6218
E-mail　info@sanyouhai.com HP http://www.sanyouhai.com

いとう画廊

兵庫県宍粟市山崎町山崎413
TEL(0790)62−0371
FAX(0790)62−0371

創業明治28年・さつき本舗

四季の菓子

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を

御菓子司 あらき

本　店：播州山崎町山田（電）62−0160

外科・内科

山中医院

院長　山中潤一

山崎町西町・TEL(62)0036

ほっと、ひといき

伊沢の里

●各種宴会　祝い、法要、同窓会(送迎バス有り)
●宿泊　観光、ビジネス　帰省
●日帰り入浴　生薬風呂、露天風呂、サウナ
●レストラン　御膳、定食、麺類、丼物

兵庫県宍粟市山崎町生谷214−1
TEL.0790-63-1380 FAX.0790-63-0362
URL:www.isawanosato.com E-mail:info@isawanosato.com

PHOTO-STUDIO
Ueyama
P.C.S

スタジオウエヤマ

●山崎店　兵庫県宍粟市山崎町山田204
TEL(0790)62-8027
FAX(0790)62-8827

株式会社 安井書店

ブックランド店
山崎町中井
TEL(64)2051・FAX(64)2052

本店(文具部)
山崎町中井
TEL(62)0700・FAX(62)2117

http://www.yasuisyoten.co.jp/